



下図は「薩摩藩船」(明治初年)の図。上図は「薩摩藩船」(明治初年)の図。

(1) (左側) (2) (右側) (3) (上側) (4) (下側)

第1章

- 1) 古島敏雄『近世日本農業の展開』(東京大学農学部、1933年)、116～149頁。
- 2) 『日本経済発展史料』巻4、292～3頁。
- 3) 『明治日本概説』、『前掲書』第5冊(佐野、記)。
- 4) 『薩摩史』(天保3年(1832～33)の『御製和蘭船』(岡山大学池田家文庫蔵)に載る船の図の分析による)。
- 5) 『薩摩史』(同様に載る大図と、船の図の図説)、『天保3年(1832年)』、14頁。
- 6) 『薩摩史』、『日本群衆生活史料集』(東京、東京大学出版会、1933年)、14～15頁。
- 7) 『薩摩史』、『薩摩和蘭史話』(五編集、1933年)、14～15頁。
- 8) 『薩摩史』、『日本海防史料集』(東京大学出版会、1933年)、14～15頁。説書は東京大学蔵の複製本による。
- 9) 『薩摩史』、『薩摩の成立と発展』(『

第1章

- 1) 古島敏雄『近世日本農業の展開』（東京大学出版会、1963年）、116～49頁。
- 2) 『日本財政経済史料』巻4、892～3頁。
- 3) 『邦内貢賦記』（『南部叢書』第5冊所収、572頁）。
- 4) 延宝元年～天和3年（1673～83）の『御留帳御船手』（岡山大学池田家文庫蔵）収載の浦証文の分析による。
- 5) 川名登『河岸に生きる人びと 利根川水運の社会史』（平凡社、1982年）、18頁。
- 6) 『寛文雑記』（『日本都市生活史料集成』6、港町篇Ⅰ所収、53～3頁）。
- 7) 石井謙治『図説和船史話』（至誠堂、1983年）、69～81頁。
- 8) 『猷芹微衷』（『日本海防史料叢書』第4巻所収、57～8頁、脱字は東京大学総合図書館本により補う）。
- 9) 中田易直「鎖国の成立と糸割符」（『

参考文献

- (1) 『開港の業務本誌』(1) 船務品目 (1)
 (2) 『開港の業務本誌』(2) 船務品目 (2)
 (3) 『開港の業務本誌』(3) 船務品目 (3)
 (4) 『開港の業務本誌』(4) 船務品目 (4)
 (5) 『開港の業務本誌』(5) 船務品目 (5)
 (6) 『開港の業務本誌』(6) 船務品目 (6)
 (7) 『開港の業務本誌』(7) 船務品目 (7)
 (8) 『開港の業務本誌』(8) 船務品目 (8)
 (9) 『開港の業務本誌』(9) 船務品目 (9)
 (10) 『開港の業務本誌』(10) 船務品目 (10)
 (11) 『開港の業務本誌』(11) 船務品目 (11)
 (12) 『開港の業務本誌』(12) 船務品目 (12)
 (13) 『開港の業務本誌』(13) 船務品目 (13)
 (14) 『開港の業務本誌』(14) 船務品目 (14)
 (15) 『開港の業務本誌』(15) 船務品目 (15)
 (16) 『開港の業務本誌』(16) 船務品目 (16)
 (17) 『開港の業務本誌』(17) 船務品目 (17)
 (18) 『開港の業務本誌』(18) 船務品目 (18)
 (19) 『開港の業務本誌』(19) 船務品目 (19)
 (20) 『開港の業務本誌』(20) 船務品目 (20)

- 東京教育大学文学部紀要 史学研究』第
 (4) 10号、1956年。後に『幕藩体制I』論集
 日本歴史7、有精堂、1973年に所収)。
 (10) 例えば、石井謙治「近世後期における
 (11) 廻船の航海—松前柏屋長春れの場合—
 (12) (児玉幸次先生古稀記念会『日本近世交
 通史研究』吉川弘文館、1979年)、同「
 北国地方における廻船の発達—とくにハ
 (13) カセ船・北国船・弁才船について—」(福
 井県立図書館他編『日本海海運史の研
 究』福井県郷土誌懇談会、1967年)、同
 (14) 前掲『図説和船史話』、多田納久義・田
 村尚ス「弁財船型帆船の帆走性能につい
 (15) て」(『海事史研究』第41号、1984年)、
 柚木孝『近世海運史の研究』(法政大学
 出版局、1979年)等を参照。
 (16) 新井白石『奥羽海運記』(甘雨亭叢書)
 8丁。
 (17) 『海事史料叢書』第2巻所収、298頁。
 (18) 『加賀藩史料』第5編、元禄6年12月

20 日条、270~272頁。『近世使節日記集』

14) 『御城米御備船大坂市中構廻船・同菱

垣廻船道具帖』(『統海事史料叢書』第

2巻所収、324~33頁)。(34~5頁)

15) 『九店差配廻船明覧』(同前、第6巻

所収、541~68頁)。(34~5頁)

16) 『御城米積船乗組人数定』(『日本財

政経済史料』巻1所収、357~8頁)。(34~5頁)

17) 『浦賀真徳録』(『浦賀奉行所関係史

料』第3集所収、278~9頁)。(34~5頁)

18) 『日本帝国第2統計年鑑』

19) 『廻船寸法割方控』(『海事史料叢書』

第9巻所収、57~8頁)。

20) 琴平海洋会館蔵、『舟船型帆船の概

21) 石井前掲『北国地方における廻船の発

達』(『日本船舶史』第1巻、134頁)

22) 『開拓使布達』(『法規分類大全第一

編』運輸門11所収、297頁)。

23) 前註(19)に同じ。

24) 佐藤秀長『米行日記』万延元年9月20

32) 条(日本史籍協会編『遣外使節日記纂輯』

36) 1所収、507~8頁)。

25) 『水戸藩史料』別記上所収、106頁。

26) 『通信省第六年報』234~5頁。

27) F.E. Paris, *Souvenirs de Marine*, vol. 6.

28) 石井謙治「西廻りによる出羽国江戸城

39) 米の廻送について一とくに航海關係を中
心として」(前掲『日本海海運史の研
究』所収)

49) 『時規物語』(『日本庶民生活史料集
成』第5巻所収、145頁)。

30) 石井前掲「近世後期における廻船の航
海」

31) 多田納・田村前掲「弁財船型帆船の帆
走性能について」

32) ニータム・松木哲他訳『中国の科学と
文明』第11巻(思索社、1981年)、258~
9頁。

33) 前註(28)に同じ。

34) 前註(30)に同じ。

- 35) 石井前掲『図説和船史論』126頁。
- 36) 石井謙治「明治期の造船近代化と日本帆船船」(『造船』第215号、1978年)。
- 37) 前註(3)(14)に同じ。
- 38) 「乍恐以書付再庇奉願上候」(『浦賢奉行所史料』第1集下巻所収、125頁)。
- 39) 造船協会編『日本近世造船史』(弘道館、1911年)2頁。附説「ワシントン日本船行」(本書巻首、礎松堂書店、1962年復刊)467頁。又「ワシントン、青森信託」(『日本郵船史』、東洋文庫87、平凡社、1961年)16頁。又「ワシントン、7月11日」(『信託利便』、海軍法務所、日米関係文庫文庫、平凡社、昭和44)23頁。又「瓦倉建王儲學校校長の提督日本遊記」(『日本郵船史』、昭和44)125-126頁。又「ワシントン、信託利便」(『ワシントン、御道日誌』、信託利便第9、雄松堂、1968年)95頁。又「瓦倉建」。
- 3) 井野茂「銅の性質及其変化」

第2章

1) 今井正訳『日本読』下巻(霞ヶ関出版株式会社, 1973年)455頁。なおテンペルは、第5巻第3章「街道筋で見た諸建築の概略」でも同様の見解を述べている(同書167頁)。

2) 例之は、山田珠樹訳『ツンベルグ日本紀行』(異国叢書、雄松堂書店, 1966年復刻)447頁、シーボルト・斎藤信訳『江戸参府紀行』(東洋文庫87、平凡社, 1967年)26頁、カッティンディーケ・水田信利訳『海軍伝習所の日々』(東洋文庫26、平凡社, 1964)23頁、工屋喬雄・玉城肇訳『ペルリ提督日本遠征記』4(岩波文庫、1955年)115-6頁、オリファント・岡田章雄訳『エルギン卿遣日使節録』(新異国叢書9、雄松堂, 1968年)95頁などを参照。

3) 井野辺茂雄「鎖国の性質及び其変化」

(同『幕末史の研究』雄山閣、1927年所収)、板沢武雄「鎖国および「鎖国論」について」(同『日蘭文化交渉史の研究』吉川弘文館、1959年所収)、沼田次郎「鎖国下の日本と西洋文化」(同編『日本と西洋』東西文明の交流6、平凡社、1971年所収)などを参照。

- 4) 『御触書寛保集成』武家諸法度之部四。
5) ここで分類を保留した諸説について簡

単に触れておこう。寛政13年、現行日本
まず、鎖国令について寛永13年に500
石以上の船の建造と二本以上の櫓を築い
諸侯の7船を解体したとする南波松太郎
説は、A-II説を修正した説と言え、ま
いが、政策の目的が明示されていない。
「造船」、朝日新聞社編『日本科学技術
史』、朝日新聞社、1962年所収)。次に、
竹越与三郎説と上野喜一郎説は、A-V
説に分類してよいかとも思われるが、立
法趣旨が前者では示しておらず、また

制限条項が含まれていないことは明らかである。

- 6) 『大日本商業史』(東邦協会、1892年) 15, 567頁。
- 7) 『日本帝国海上権力史講義』(海軍大学校、1902年) 165頁。
- 8) 『日本運送史』(交通時論社、1929年) 19頁。
- 9) 『海の大日本史』下巻(文芸館、1903年) 42頁。
- 10) 『火繩銃から黒船まで』(岩波新書、1970年) 100頁。因に、『石川島重工業株式会社108年史』(石川島重工業、1961年)の造船制限説(179頁)も、行政指導という点を除けば奥村説と同じである。
- 11) 『日本海法史』(巖松堂書店、1927年) 238頁。さらに住田説で見逃せないのは、慶長14年に異教禁止と諸侯水軍の勢力抑止のため500石以上の船を没収したとい

う点である（237～8頁）。これについて
は後段で論じることにした。

なお、『海上運送史論』（同前、1925
年）では、鎖国政策のため、寛永12年に
500石以上の船を没収して、その建造を
禁じたとある（79～80頁）一方、慶長14
年に500石以上の船を没収・毀損し、寛
永15年にその建造を禁止したとも述べて
いる（216～7頁）。根拠は示されてい
ない。

12) 『海運興廢史』（海軍省報社、1927年）
182頁。

13) 『日本水運史』（海軍省教育局、1933
年）161頁。

14) 『日本近代造船史序説』（巖南堂書店、
1978年）3～4頁。なお、寛永15年の商
船に打てる緩和措置により国内海運には
所謂「千石船」が輸送に従事したと寺谷
氏は述べているから、寛永12年の造船制
限令の適用範囲は大名・町人・百姓とい

1) 江戸時代 (寛政一〇八五) の海防

「江戸時代」の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

の海防は、江戸時代

うことになる。

15) 『日本海事情慣習史』(古川弘文館、19

67年) 1〜3頁、金指氏は、「江戸時代

の造船法」(『海防史研究』第7号、19

66年) でも同じ説を展開しているが、一

部に論旨の不明な箇所がある。

16) 「鎖国時代の和型帆船——とくに造

船制限との関連について——」(神戸商

科大学『商大論集』第20巻第4号、1968

年)。大船建造禁止令については、存在

の疑い元和3年の武家諸法度ととりあ

は(『御触書寛保集成』武家諸法度之部

二)。その立法趣旨を諸大名の軍力カ

の抑止から、貿易統制の一環と断じ難い

としている。

17) 「船と航海の歴史」(『鎖国と海防』

人物海の日本史6、毎日新聞社、1979年

所収)。石井氏は幕府の水軍力抑止政策

に言及しているが、文脈から慶長14年

の大船没収のことと思われる。

石井氏の旧説の中では、「北国地方に
おける廻船の発達——とくに八幡船・
北国船・弁才船について——」（福井県
立図書館・福井県郷工誌懇談会編『日本
海海運史の研究』福井県郷工誌懇談会、
1967年所収）において、水密甲板など航
洋性をもたせる構造が禁じられたとする
説が注目に価する。石井氏はケンペルと
ゾンベルクの著作から、何らかの形で禁
令の存在したことは否定し得べくもない、
とみるのである。ところが、彼等は幕府
の規制が存在すると述べるばかりでなく、
規制の対象は船尾構造と明言しており、
水密甲板には触れるところはない（両著
の見解については、前註（1）及び前掲
『ゾンベルク日本紀行』447頁を参照）
地方、石井氏は船尾構造を問題にしてい
ないので、石井説は説得力に欠けると言
わざるを得ない。なお、彼等の所説は、
次節で検討することにした。

- 18) 「千石船」(『日本造船学会誌』第61号、1981年)。
- 19) 中田易直「鎖国の成立と糸割符」(『東京教育大学文学部紀要 史学研究』第10号、1956年。後に『幕藩体制Ⅱ』論集 日本歴史7、有精堂、1973年に所収)を参照。
- 20) 菱垣廻船については、石井謙治「海防技術」(豊田武・児玉幸次編『交通史』体系日本史叢書24、山川出版社、1970年所収)を参照。幕末には和船に比して洋式船の建造費と運航費の高さから船の子振を生み出すことについては第5章を参照。
- 21) 例文は天保9年「新立丸新造情報」(『経海事史料叢書』第2巻、85~96頁)。
- 22) 烏貝船については『肥後航用集』(『日本科学古典全書』第12巻、469~490頁)、押送船については『今西氏家船經墨私記』坤(『日本庶民生活史料集成』第10巻、657頁)を参照。漁撈用であり

島見船も三櫓にvariはない。(武) 文庫

23) 前掲『日本誌』下巻、168頁。

24) 『通航一覽統輯』附録卷之21 (清文堂出版本第5巻、352頁)。

25) 『通航一覽』附録卷之21 (圖書刊行会本第8巻、545頁)。

26) 例えは、『通航一覽』附録卷之21 (圖書刊行会本第8巻、543~5頁)、栗田元次『江戸時代史』上1 (総合日本史大系第9巻、内外書籍、1927年) 143頁を参照。

27) 石井謙治「名古屋城図の安定船について」(『国華』第915号、1968年)、同「船と航海の歴史」(『天下人と南蛮船』人物誌の日本史4、毎日新聞社、1979年所収)。

以下安定船と水軍に関する記述は、尤の二論文による。

28) 『史籍雜纂』第2、154頁。

29) 「御達上之天船・同道具請取目録」(

蜂須賀家文書、文部省史料館蔵)。勿論、

この「大船」は安宅船の謂である。

30) 前掲「鎖国の成立と糸割符」

31) 「鎖国」(岩波講座『日本歴史10』並世2、岩波書店、1962年所収)。

32) 石井謙治「船と航海の歴史」(『朱印船と南海雄飛』人物海の日本史9、毎日新聞社、1978年所収)を参照。

33) 中田氏は、没収された船について、前掲「鎖国の成立と糸割符」では「五百石以上の大船」とし、「十世紀初頭の河外交渉」(沼田次郎編輯前掲『日本と西洋』所収)では「五百石積以上の軍船」とする。大船を軍船に限定しては、中田説の成立に余地はないと言、マよいだらう。

34) 『船法御定並諸方聞書』(『海軍史料叢書』第1巻所収、113頁)。当時の船舶事情については、石井謙治前掲「海洋技術」を参照。なお『邦訳日葡辞書』が「安宅」を「大きな船の名」としている

40) の目注目に通ずる。

35) 岩生成「『朱印船貿易史の研究』(弘文堂、1958年) 15~6頁参照。

36) 同上、64、197~8、271~2頁及び表7「個人別・年次別朱印船派船表」と参照。

37) 前註(11)と参照。

38) 二通の解説は、ここにとりあけた諸氏に限らず、例えば、藤田寛「村外危機の深化と幕政の動向——嘉永2年の海防諮問と海防強化令をめぐって」(豊田武先生古稀記念会編『舊撰日本近世の政治と社会』吉川弘文館、1980年所収)や諸大名の軍事力抑止説をとり、園田英弘「『幕末文化の研究』(岩波書店、1978年所収)の鎖国政策説に立つように共存している。

39) 石井謙治「巨船安宅丸の研究」(『海軍史研究』第22号、1974年)。同「安宅丸の機装工の矛盾と計画者のこと」(同前、第27号、1976年)。

40) 前註(3)を参照。

41) 正確に言えば、この二派の他にも「列
巨銃於海岸、寇至擊却之」とか、或は「
水戦者虜之長技、非我所持以制虜、必致
之陸地、然後可戰也」とか主張して水戦
を不用とする派がある。これを最初に唱
えたのが誰か詳にたし得なか、たゞ、文
政8(1825)年の『新論』で批判されて
いる(『水戸学』日本思想系53所収、
408頁)。なお、以上の三派について
福沢諭吉が『唐人往來』で活字している
(『福沢諭吉全集』第1巻所収、19~20
頁)ので参照されたい。

42) 『日本經濟叢書』第17巻所収、176頁。

43) 卷之上(彫璞園藏板、1820年)9葉。

なお、古賀精里・洞庵の海防論につ
いては、梅沢秀夫「近世後期の朱子学と海
防論——古賀精里・洞庵の場合——」(
近代日本研究会編『幕末・維新の日本』
年報・近代日本研究3、山川出版社、19

of Japan, 2 vols.). その後1729年・1733年の2回にわたって蘭語に翻訳されている (De Beschrijving van Japan) (沼田次郎「ケンペルの人と業績」ケンペル著 *History of Japan* 刊行250年記念ファクシミリ版解説、雄松堂書店、1977年所収)。さて、問題は英語版の 'leave the stern quite open' (雄松堂ファクシミリ版下巻附録62頁) が、蘭語版では 'het steeven ten eenemaal openlaten' (1729年版・1733年版483頁、国立国会図書館蔵江戸幕府旧蔵蘭書。兩版とも丁付に誤植があり、484頁が正しい) となっており、といふところである。'steeven' 或は 'steeven' なる語は、蘭仏辞典 (*Woordenboek der Nederduische en Fransche Taalen*. Amsterdam, 1729. 東京大学総合図書館蔵) によると「船首材・船尾材」、また蘭蘭辞典 (*Beknopt Nederduische Taalkundig Woordenboek*. Dordrecht,

1826-30. 同前) にみれば「船首杆・船尾杆・船首」を意味するので、いおれにせよ、文意は通じない。恐らくは、ヤンペルが和船について語、た第5巻第3章で‘stern’(下巻410~1頁)と‘achtersteeven’或は‘achtersteeven’(291~2頁)と訳した如く、ここでも‘achtersteeven’としたのび、誤植によ、て‘achter’が落ちたため、このような結果を来したのではなからうか。因に、「第廿一回を見よ」という一節は、英語版・蘭語版・仏語版に見えるが、ドーム校訂版には欠けている。

- 68) 沼田次郎訳『ティ・チン・ク日本風俗図説』(新異国叢書7, 雄松堂書店, 1970年) 266~7頁。
- 69) 田保稚潔「イカー・ク・ティ・ツィン・ク」の日本研究」(『史学雑誌』第39編第11号, 1928年)。
- 70) 前掲『ティ・チン・ク日本風俗図説』268

～9頁。この記事については、沼田次郎
「田沼時代とイガー・フ・ティ・チンク」(『
日本歴史』第380号、1980年)を参照
したい。

71) 石井謙治「鎖国時代の航洋船建造 —
寛文の唐船と天明の三國丸」(宮本常一・
川添登編『日本の海洋民』未來社、1974
年所収)、同「和洋中折衷船三國丸」(
『七洋』1979年5～6月号)を参照。

72) 辻善之助『日本文化史』別録4(春秋
社、1970年)200～2頁、沼田次郎前掲
「田沼時代とイガー・フ・ティ・チンク」な
どを参照。

73) 明治11年9月10日『郵便報知新聞』(東
京大学法学部明治新聞雑誌文庫所蔵の
マイクロフィルムによる)。なお「大船
の説」は、さらに10月1、3、5日と掲
載され、後に『砲臺十種』『砲臺遺稿』
に収められている。

74) 明治11年8月12日同前、「出鱈目草子」。

75) 明治11年9月9日同前。「出鱈目草子」。

76) 『黄梁一夢』坤(1883年)巻9, 3葉裏~4葉表。

77) 中西洋『日本近代史の基礎過程』上(東京大学出版会, 1982年)120頁を参照。兼松は、木村とは第二次海軍伝習中に、また栗本とは文久2年外国奉行支配調懸に転任後に親交を結んだのであろう。

78) 『日本科学古典全書』第12巻所収、787頁。

79) 例えば、A説の系譜に連なる諸著作を参照。

80) 『横須賀海軍船廠史』(原書房、1973年復刻)2頁。

81) 田中健夫『中世村外関係史』(東京大学出版会、1975年)3~4頁。

82) 前註(6)を参照。彼は『海防臆測』を引用しているが、「破壊大船令小」の「令小」を見落したらしい。

第3章

- 1) 以下の安宅船と関船に関する記述は次の研究による。石井謙治「名護屋城國の安宅船について」〈『國華』第915号、1968年〉、同『國説和船史話』(至誠堂、1983年)60~68頁、152~170頁。
- 2) 『艦法—菅道船束組秘訣』(岡山大学池田家文庫蔵)
- 3) 本章執筆にあたり、下記の論著を参考にさせていただいた。田保橋潔『譜近代日本外国関係史』(刀江書院、1943年)、井野辺茂雄『新訂維新前史の研究』(中文館書店、1942年)、菊池勇夫『幕藩体制と蝦夷地』(雄山閣出版、1984年)、津田秀夫『天保改革』(日本の歴史22、小学館、1975年)、北島元正『水野忠邦』(人物叢書158、吉川弘文館、1969年)、同編『政治史II』(体系日本史叢書2、山川出版社、1965年)、佐藤昌介『洋学

- 8 『史研究序説』(岩波書店, 1964年), 同
- 9 『洋学史の研究』(中央公論社, 1980年), 藤田寛「天保改革と対外的危機」(『日本史研究』第193号, 1978年), 同「天保改革期の海防政策について——対外的危機と天保改革」(『歴史学研究』第469号, 1979年6月), 「海防論と東アジア——対外的危機と幕藩体制国家」(青木美智男・河内八郎編『開国』講座日本近世史7, 有斐閣, 1985年),
- 4) 宮下豊「浦賀番所の研究——享保期を中心として——」(『海事史研究』第30号, 1978年) 光記, 卷之1 (337頁)。
- 5) 『通航一覽』附録卷之9, 10(国書刊行会本第8, 367~397頁)。
- 6) 『宇下人言・修行録』(岩波文庫, 1942年) 167~9頁。
- 7) 「主膳正・丹後守之越中守殿御疾候御書取」(『陸軍歴史』第12所収, 原書房復刻本上巻, 365~367頁)。

8) 前掲『宇下人言・修行録』169頁、記
 9) 松平越中守「蝦夷御取締建議」(『蝦夷御備一件』1所収、東京大学史料編纂所蔵)。

10) 松平越中守「書付」(同前)

11) 「蚕・焼藻の記」(『日本随筆大成』第2期11巻所収、262~3頁)。

12) 『休明光記』巻之4(『新撰北海道史』第5巻所収、398頁)。

13) 「蝦夷地御取締並開國之儀相含取計方申上候書付」(前掲『休明光記』付録巻之1、557頁)。

14) 前掲『休明光記』巻之1、(337頁)。

15) 『蝦夷地開墾記』(北海道文学図書館蔵)。

16) 前掲『蝦夷地開墾記』で鈴木日帆について次のように記している。

(4)
 帆幅=十七尺但し不綿巾金、長十四尺三寸五寸豊長
 艦帆柱=本立

艦帆長 = 丈五尺、横中唐中木綿八反宛
有

船先 = 矢帆立

18) 船先帆長一丈五尺、横中唐幅木綿三反
ナリ

本帆は中八寸の木綿を三反合はせて1端

2尺2寸中と仮定し、正確な中の分らな

い唐中木綿は恐らく広中の木綿と思われ

るので1反 = 3尺として、矢々の面積を

算出した。石井謙治「帆について(二)

— 特に商船の積石数と帆の端数との関

係について —」(『海事史研究』創刊

号, 1963年)を参照。

17) 前掲『蝦夷地開港記』によると船の主
要寸法は

25) 御船之長サ十九間半、横中中六間、船

幅四間、深サ二間

26) である。航長は、弁才船型とあると、12

27) 間程度と推定されるから、積石数は3000

28) 石余となる。これでは同書にみえる神風

丸の積石数1460石と大きく喰違うので、
間口尋〇誤記と考へて主要寸法を算出し
た。

18) 「文化五年蝦夷地為御用振州兵庫高田
屋嘉兵衛於手元從公儀造作被仰付候御船
之絵図」(市立函館圖書館藏)

19) 『東蝦夷地日記』(東北大学圖書館藏)。

20) 前掲『蝦夷地開墾記』(註1)所収(79頁)。

21) 「蝦夷地並箱館取計之度々申上候書付」
(前掲『休明光記』附録卷之5, 745頁)。

22) 『原始謾筆風土耳表』上(みちのく双
書第9集, 244頁)。

23) 前掲『休明光記』卷之1(336~7頁)。

24) 『渡海新法』(『海軍史料叢書』第6
卷所収, 226~8頁)。

25) 同前(269頁)。「渡海日記」(『東
京市史稿港灣篇』第2所収, 335~40頁)。

26) 前掲『渡海日記』。

27) 前掲『渡海新法』(230~1頁)。

28) 「蝦夷地御用冲栗御船天文方差添差遣

候儀申上候書付」(前掲『休明光記』附
 録卷之1, 573頁)。
 29) 例之12, 『船道御高札写并公儀御船入
 津出帆諸始末其外諸御用留』(岩手県立
 図書館蔵)に於て, 寛政8年7月に向
 井将監組の水主同心の乗組んだ政徳丸が
 宮古に入津している。
 30) 『蝦夷地御用見合書物類』所収(阿部
 家文書)
 31) 南沢松太郎氏蔵
 32) 『原始謄筆風土年表』下(みちのく双
 書第10集, 124頁)。
 33) 『休明光記遺稿』巻之2(『新撰北海
 道史』第5巻所収, 1270~3頁)。
 34) 『通航一覽』巻之11(国書刊行会本第
 3, 397~408頁)。
 35) 同前, 巻之10(391頁)。
 36) 前註(34)に同じ
 37) 佐藤前掲『洋学史研究序説』234~9頁。
 38) 『通航一覽続編』附録巻之17, 18(清

候儀申上候書付」(前掲『休明光記』附
 録卷之1, 573頁)。
 29) 例之12, 『船道御高札写并公儀御船入
 津出帆諸始末其外諸御用留』(岩手県立
 図書館蔵)に於て, 寛政8年7月に向
 井将監組の水主同心の乗組んだ政徳丸が
 宮古に入津している。
 30) 『蝦夷地御用見合書物類』所収(阿部
 家文書)
 31) 南沢松太郎氏蔵
 32) 『原始謄筆風土年表』下(みちのく双
 書第10集, 124頁)。
 33) 『休明光記遺稿』巻之2(『新撰北海
 道史』第5巻所収, 1270~3頁)。
 34) 『通航一覽』巻之11(国書刊行会本第
 3, 397~408頁)。
 35) 同前, 巻之10(391頁)。
 36) 前註(34)に同じ
 37) 佐藤前掲『洋学史研究序説』234~9頁。
 38) 『通航一覽続編』附録巻之17, 18(清

49) 『通航一覽統輯』附録卷之3 (清文堂出版本第5巻, 23~7頁)。

50) 同前, 附録卷之7, 12 (101~3, 192~3頁)。

51) 同前, 附録卷之13, 14 (205~8, 225~6頁)。

52) 藤田前掲「天保改革期の海防政策について——対外的危機と天保改革——」。

53) 佐藤前掲『幕末洋学史の研究』220頁。

54) 『豆州下田御備場類集』所収文書 (『浦賀奉行所関係史料』第三集所収, 322頁)。

55) 佐藤前掲『洋学史研究序説』308~9頁所引。

56) 「下田奉行江渡候書付」(前掲『豆州下田御備場類集』所収, 321~2頁)、「羽田奉行江渡候書付」(『御備場集義輯』所収, 国立公文書館内閣文庫蔵)。

57) 前掲『豆州下田御備場類集』所収 (341~2頁)。

羽田表御備船下田丸・千里丸代御船
 并新規御船々御造立、其外御船屋引建直
 御普請之儀=付猶又奉伺候書付」（『相
 州御備向御用留』『浦賀奉行所関係史料
 集』茅乃集，27頁所収）
 58）『日本財政經濟史料』第4卷，1110～
 1121頁）。『北前船頭』茅乃自叙伝——川
 59）前掲『御備場集義』所収。
 60）『羽田』本牧迄見分仕候儀=付申上候
 書付」（同前所収）。『日本財政經濟史料』
 61）同前所収文書。『日本財政經濟史料』
 62）『羽田御備場御武器并御道具類惣有高
 帳』（前掲『御備場集義』2所収），『
 通航一覽統輯』附録卷之11（清文堂出版
 本第5卷，183～90頁）。『日本財政經濟史料』
 63）『通航一覽統輯』附録卷之11（同前）。
 64）『浦賀表御備船下田丸・千里丸代御船
 并新規御船々御造立、其外御船屋引建直
 御普請之儀=付猶又奉伺候書付』（『相
 州御備向御用留』『浦賀奉行所関係史料
 集』茅乃集，27頁所収）
 58）『日本財政經濟史料』第4卷，1110～
 1121頁）。『北前船頭』茅乃自叙伝——川
 59）前掲『御備場集義』所収。
 60）『羽田』本牧迄見分仕候儀=付申上候
 書付」（同前所収）。『日本財政經濟史料』
 61）同前所収文書。『日本財政經濟史料』
 62）『羽田御備場御武器并御道具類惣有高
 帳』（前掲『御備場集義』2所収），『
 通航一覽統輯』附録卷之11（清文堂出版
 本第5卷，183～90頁）。『日本財政經濟史料』
 63）『通航一覽統輯』附録卷之11（同前）。
 64）『浦賀表御備船下田丸・千里丸代御船
 并新規御船々御造立、其外御船屋引建直
 御普請之儀=付猶又奉伺候書付』（『相
 州御備向御用留』『浦賀奉行所関係史料
 集』茅乃集，27頁所収）

- 58) 「当四月日光御留守中下田湊御国×之
 儀=付奉伺候書付」（同前所収，323～
 4頁）。『日本財政經濟史料』第4卷，
 59) 前掲『御備場集義』所収。
 60) 「羽田本牧迄見分仕候儀=付申上候
 書付」（同前所収）。『日本財政經濟史料』
 61) 同前所収文書。『日本財政經濟史料』
 62) 「羽田御備場御武器并御道具類惣有高
 帳」（前掲『御備場集義』2所収），『
 通航一覽統輯』附録卷之11（清文堂出版
 本第5卷，183～90頁）。『日本財政經濟史料』
 63) 『通航一覽統輯』附録卷之11（同前）。
 64) 「浦賀表御備船下田丸・千里丸代御船
 并新規御船々御造立、其外御船屋引建直
 御普請之儀=付猶又奉伺候書付」（『相
 州御備向御用留』『浦賀奉行所関係史料
 集』茅乃集，27頁所収）
 58) 『日本財政經濟史料』第4卷，1110～
 1121頁）。『北前船頭』茅乃自叙伝——川
 59) 前掲『御備場集義』所収。
 60) 「羽田本牧迄見分仕候儀=付申上候
 書付」（同前所収）。『日本財政經濟史料』
 61) 同前所収文書。『日本財政經濟史料』
 62) 「羽田御備場御武器并御道具類惣有高
 帳」（前掲『御備場集義』2所収），『
 通航一覽統輯』附録卷之11（清文堂出版
 本第5卷，183～90頁）。『日本財政經濟史料』
 63) 『通航一覽統輯』附録卷之11（同前）。
 64) 「浦賀表御備船下田丸・千里丸代御船
 并新規御船々御造立、其外御船屋引建直
 御普請之儀=付猶又奉伺候書付」（『相
 州御備向御用留』『浦賀奉行所関係史料
 集』茅乃集，27頁所収）

- 67) 前註(30)に同じ
- 68) 榎森達「松前交易における日本海々運
の発展形態」(『日本歴史』第275号,
1971年)
- 69) 「船絵図」(弘前市立図書館蔵)。
- 70) 『島根のすさみ』(『日本庶民生活史
料集成』第3巻所収, 291頁)。
- 71) 同前(338頁)。
- 72) 「長者丸」航海日記(『松前町史』第
3巻, 341~432頁)。
- 長者丸の航海の詳細については次の論
考を参照したい。石井謙治「近世後期
における廻船の航海——松前柏屋長者丸
の場合——」(児玉幸次先生古稀記念会
編『日本近世交通史研究』吉川弘文館,
1979年), 同「江戸時代の帆船航海——
坂元〜江戸, 長者丸を追, 2——」(『
自然』第413号, 1980年)
- 73) 例えは『北前船頭の幕末自叙伝——川
渡基太夫一代記——』(柏書房, 1981年)

（『海軍史料叢書』第8巻所収，28頁。
 75）『東海参譚』（『日本庶民生活史料集成』第3巻所収，25～6頁）。
 76）前註（68）に同じ。
 77）工藤旺男「南部藩御用銅船徳寿丸の難
 船始末記」（『弘前大学教育学部紀要』
 第29号，1973年）。
 78）同前。工藤氏の原文引用では「中帆橋」
 となっているが、「橋」は「櫓」の誤記
 か誤植とみてまじ間違いない。
 79）公爵島津家編纂所編『薩藩海軍史』上
 巻（原書房，1968年復刻）739頁。
 80）『環海異聞』（『北門叢書』第4冊所
 収，126～7頁）。
 81）『中陵漫録』（『日本随筆大成』第三
 期第三巻所収，83頁）。
 82）前註（15）に同じ。なお前註（16）を
 参照。
 83）F. E. Paris. *Souvenirs de Marine*, vol. 6. Paris,

を参照。

- 84) 『林文学頭大船解柁の評議』(『陸軍歴史』
卷16所収, 原書房復刻本下巻, 21~3頁)。
85) 同前(25頁)。
86) 『通航一覽続輯』附録卷之21(清文堂
出版本第8巻, 352~3頁)。
87) 津田前掲『天保改革』, 359~61頁。
88) 『通航一覽続輯』巻之5(清文堂出版
本第1巻, 88~89頁)。
89) 『幕末外国関係文書之十七』所収, 文
書番号261, 851頁。
90) 「於浦賀表先般御新調有之候船之儀 =
付了簡之趣申上候書付」(『箋策雑収』
所収, 岡山大学池田家文庫蔵)。
この上申書には差出人の名を欠くが、
内容から海防掛であることは明白であり、
スルーフの見分けに関する勘定所の見解
に言及しているところから、海防掛の又
小目付に間違いはない。この時の海防掛
の又小目付が深谷益房、戸川安鎮、本多

1908.

- 84) 林文学頭大船解柁の評議(『陸軍歴史』
卷16所収, 原書房復刻本下巻, 21~3頁)。
85) 同前(25頁)。
86) 『通航一覽続輯』附録卷之21(清文堂
出版本第8巻, 352~3頁)。
87) 津田前掲『天保改革』, 359~61頁。
88) 『通航一覽続輯』巻之5(清文堂出版
本第1巻, 88~89頁)。
89) 『幕末外国関係文書之十七』所収, 文
書番号261, 851頁。
90) 「於浦賀表先般御新調有之候船之儀 =
付了簡之趣申上候書付」(『箋策雑収』
所収, 岡山大学池田家文庫蔵)。
この上申書には差出人の名を欠くが、
内容から海防掛であることは明白であり、
スルーフの見分けに関する勘定所の見解
に言及しているところから、海防掛の又
小目付に間違いはない。この時の海防掛
の又小目付が深谷益房、戸川安鎮、本多

安英であることは、海防掛の勘定吟味役
佐々不顕発の『御備場御用留』六（国立
公文書館内閣文庫蔵）によつて裏付けら
れる。

- 91) 同前。
- 92) 『市中取締類集』1。
- 93) 高島流火術諸家伝授不苦の指令（『陸
軍歴史』巻1，原書房復刻本上巻，30～
1頁）。
- 94) 『柳營補任』2、4、6。
- 95) 例之は、手谷武明『日本近代造船史序
説』（巖南堂書店，1978年）3～4頁。
- 96) 例之は、園田英弘「幕末海防と文明—
—共有世界の成立と展開—」（林屋辰
三郎編『幕末文化の研究』岩波書店，19
78年所収）
- 97) 『水戸藩史料』別記上所収，174～5頁。
- 98) 天保8年「伊豆国御備場之儀ニ付存付
申上候書付」，嘉永2年「存付之趣申上
候書付」（『江川担庵全集』下巻所収，

112) ていない。けれども嘉永4年3月に老中
113) から浦賀奉行に渡された書付に

114) 御備船之儀ニ付而者、舊臘相違置候趣
も有之候得とも、右ニ不拘、全く別廉
115) を以、蒼隼丸形御船壹艘、試のため櫓
を用白木にて製造被仰付候

と見え(『通航一覽続輯』附録卷之11、清
116) 文堂出版本第5巻、181~2頁)才に嘉永
6年7月に老中が浦賀奉行に軍艦建造を
諮った書付に

117) 異国船ニ不紛様之儀相違置候趣も有之候
118) 得共、右等ニ不拘大筒打方自在ニ出来
いたし進退弁理之御船製造方も有之候
119) ハ、早々致敷弁取調可被申聞候事

とある(『^{恩恩丸}御軍艦建造立付御見分済迄之書類』、
慶応義塾大学図書館蔵)ことより、嘉永
3年12月に浦賀奉行に「異国船ニ不紛様」
120) という趣旨の達が下されたことはまず問
違いない。

111) 『水戸藩史料』別記上、184頁。

安永の月日と年を求むるは、1151年

の行事を以て其の行事を以て

歌仙重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

重宝の歌仙。重宝の歌仙

112) 同前、122頁。

113) 同前、184頁。

114) 『日本海防史料叢書』第4巻所収、237～8頁。

115) 『新伊勢物語』所収、弘化3年7月13日付阿部正弘宛徳川斉昭書簡(『茨城県史料』幕末編Ⅰ所収、66頁)。

116) 天保14年4月の幕府からの質問状とオランダ商館長の回答書及び閏9月付覚(『御用方諸書留』所収、長崎市立博物館蔵)。

117) 佐藤前掲『洋学史の研究』、358～60頁。

118) 天保14年閏9月2日付扣(前掲『御用方諸書留』所収)。

119) 天保14年閏9月2日付徳川斉昭宛水野忠邦書簡(徳富猪一郎『近世日本国民史』彼理来航及其当時』民友社、1934年所収、318頁)。

120) 御用方の『諸書留』については、佐藤前掲『洋学史の研究』、335～43頁を参照。

121) 前掲『御用方諸書留』の天保13、14年

近世5、岩波書店、1977年所収)、同「
水戸学の特質」(『水戸学』日本思想大

系 53 所收)。

© 2006 The Authors
Journal compilation © 2006 Blackwell Publishing Ltd

第4章

- 1) 『海軍歴史』巻之1, 2 (原書房覆刻本, 12, 17~8頁)。
- 2) 例之15, 金子栄一編『造船』(現代日本産業発達史Ⅺ, 現代日本産業発達史研究會, 1964年) 21~2, 100~1頁, 奇谷武明『日本近代造船史序説』(巖南堂書店, 1978年) 3~34頁, 小林正彰『八幡製鉄所』(教育社歴史新書〈日本史〉112, 1977年) 30~41頁, 山下幸夫『海運と造船業』(日本海運経営史6, 日本経済新聞社, 1984年) 30~2頁を参照。
- 3) 「明治期の造船近代化と日本形帆船」(『造船』第215号, 1978年)。
- 4) 「船と航海の歴史」(『黒船と咸臨丸』人物海の日本史6, 毎日新聞社, 1979年)。
- 5) 『島津斉彬文書』下巻1所収。文書番号141, 414~5頁。
- 6) 同前, 文書番号144, 430頁。

但野島書庫」に、15頁「出帆軍艦」(1)

。(頁8-11, 51, 52)

日外史」(明治10年刊、田代健「3

就其出帆軍艦の日外史、明治10年刊、

全巻、頁1-101, 5-12(其外史、全巻

全巻所載)に「出帆軍艦」の語あり。明治

10年刊、明治10年刊、明治10年刊、

明治10年刊、明治10年刊、明治10年刊、

明治10年刊、明治10年刊、明治10年刊、

明治10年刊、明治10年刊、明治10年刊、

明治10年刊、明治10年刊、明治10年刊、

明治10年刊、明治10年刊、明治10年刊、

明治10年刊、明治10年刊、明治10年刊、

明治10年刊、明治10年刊、明治10年刊、

明治10年刊、明治10年刊、明治10年刊、

明治10年刊、明治10年刊、明治10年刊、

明治10年刊、明治10年刊、明治10年刊、

明治10年刊、明治10年刊、明治10年刊、

明治10年刊、明治10年刊、明治10年刊、

7) 沼田次郎「九州諸藩の蘭学」(箭内互

次監修『外來文化と九州』九州文化論集

2, 平凡社, 1973年所収)。

8) 公府島津家編纂所『薩藩海軍史』二巻,
597~765頁。

9) 長崎大学図書館経済学部分館武蔵文庫
蔵。

10) 『海事史料叢書』第9巻所収, 193~

235頁。同書には「和蘭本國蒸氣軍艦の

船將次官ファビウス、士官デフルト、船

匠ヘルフィンに就て軍艦の構造を船製

造の事、士官の通弁を以て聞得たる説、

又見聞たる絵図等を如し」とみえる。

11) 神戸大学図書館佳田文庫蔵。

12) 『和洋船艦損益備考論』(東京大学蔵
旧海軍文庫)。

13) 前掲『薩藩海軍史』二巻, 815頁。

14) 『齊彬公史料』(『鹿児島県史料 齊
彬公史料』第二巻所収, 文書番号38, 71

~2頁)。

25) 田 若沢形船製造御用留書 (江川家文書,

国立史料館所蔵のマイクロフィルムによる

26) 『齊彬公史料』(前掲『鹿児島県史料』)

第2卷所收，文書番号 537, 901頁)。

27) 前掲『薩藩海軍史』上卷，739頁。

28) 『海軍歴史』卷之2 (原書房覆刻本,

38) 17 ~ 8 夏)。晴守公務日記。6 安政 2 年

29) 「大船の説」 (『鰐魔十種』報知社,

1892 年所取, 115 頁)。

30) ^註幕末外國關係文書之十卷所收，文書

番号 176, 456 頁)。

31) 『今西氏家船總墨私記』坤 (『日本原』)

民生活史料集成』第10卷所收，(657頁)

32) スク - 子ル船打立仕様諸入用凡複

記帳』(京都天竺圖書館藏)。

33) 和船の不割法については、石井謙治

関船の分割法の流れについて (母)

史研究》第11号，1968年）。

34) 刪稿。據潘海軍文目上卷，151文。

『奉天通志』(上)『聖州城址沿革研究』(22)
『白山』(1)、『白山』(2)、『白山』(3)、『白山』(4)

『白山』(5)、『白山』(6)、『白山』(7)、『白山』(8)
『白山』(9)、『白山』(10)、『白山』(11)、『白山』(12)

『白山』(13)、『白山』(14)、『白山』(15)、『白山』(16)
『白山』(17)、『白山』(18)、『白山』(19)、『白山』(20)

『白山』(21)、『白山』(22)、『白山』(23)、『白山』(24)
『白山』(25)、『白山』(26)、『白山』(27)、『白山』(28)

『白山』(29)、『白山』(30)、『白山』(31)、『白山』(32)
『白山』(33)、『白山』(34)、『白山』(35)、『白山』(36)

『白山』(37)、『白山』(38)、『白山』(39)、『白山』(40)
『白山』(41)、『白山』(42)、『白山』(43)、『白山』(44)

『白山』(45)、『白山』(46)、『白山』(47)、『白山』(48)
『白山』(49)、『白山』(50)、『白山』(51)、『白山』(52)

『白山』(53)、『白山』(54)、『白山』(55)、『白山』(56)
『白山』(57)、『白山』(58)、『白山』(59)、『白山』(60)

『白山』(61)、『白山』(62)、『白山』(63)、『白山』(64)
『白山』(65)、『白山』(66)、『白山』(67)、『白山』(68)

『白山』(69)、『白山』(70)、『白山』(71)、『白山』(72)
『白山』(73)、『白山』(74)、『白山』(75)、『白山』(76)

35) 『村垣淡路守公務日記』6, 『安政2年
11月9日条(『幕末外国関係文書附録之
三』所収, 410頁)。

36) 『堅山利武公用控』8, 『安政2年11月
29日条(前掲『鹿児島県史料 青柳公史
料』第4巻所収, 529頁)。

37) 前掲『薩藩海軍史』上巻, 655頁。

38) 『村垣淡路守公務日記』6, 『安政2年
8月29日条(『幕末外国関係文書附録之
六』所収, 348頁)。

39) 前註(25)に同じ。

40) 『軍艦見取図外諸港見取図』(東京大
学史料編纂所蔵)。

41) 前註(25)に同じ。

42) 前掲『薩藩海軍史』上巻, 753~65頁。

43) 『村垣淡路守公務日記』7, 『安政3年
6月18日条(『幕末外国関係文書附録之
四』所収, 172頁)。

44) 前註(26)に同じ。

45) 前掲『薩藩海軍史』上巻, 759~6頁。

本五箇年、日、五箇日、縣公、中、部、出、行、(25)
 上、給、所、書、文、部、開、國、共、事、集、(1) 本日、9月、11日

(第 014、外、所、求、上、部、出、行、
 本、五、箇、年、日、五、箇、日、縣、公、中、部、出、行、(25)
 上、給、所、書、文、部、開、國、共、事、集、(1) 本日、9月、11日

(第 014、外、所、求、上、部、出、行、
 本、五、箇、年、日、五、箇、日、縣、公、中、部、出、行、(25)
 上、給、所、書、文、部、開、國、共、事、集、(1) 本日、9月、11日

(第 014、外、所、求、上、部、出、行、
 本、五、箇、年、日、五、箇、日、縣、公、中、部、出、行、(25)
 上、給、所、書、文、部、開、國、共、事、集、(1) 本日、9月、11日

(第 014、外、所、求、上、部、出、行、
 本、五、箇、年、日、五、箇、日、縣、公、中、部、出、行、(25)
 上、給、所、書、文、部、開、國、共、事、集、(1) 本日、9月、11日

(第 014、外、所、求、上、部、出、行、

(第 014、外、所、求、上、部、出、行、

(第 014、外、所、求、上、部、出、行、

46) 『青杉公史料』(前掲『鹿児島県史料』
 第3巻所収、文書番号 720、1010頁)。

47) 前註(42)に同じ。

48) 前註(46)に同じ。

49) 前註(22)に同じ。

50) 『青杉公史料』(前掲『鹿児島県史料』
 第3巻所収、文書番号 720、1010頁)。

51) 『堅山利武公用控』11、安政3年5月
 2日条(前掲『鹿児島県史料』第4巻所
 収、681頁)。

52) 前註(42)に同じ。

53) 前掲『鹿児島県史料』第4巻所収、640
 頁。

54) 前註(26)に同じ。

55) 前註(45)に同じ。この「鳳瑞丸船具
 一式覧」によると、帆桁10本に帆12枚を
 装備しているから、シフ3枚、横帆8枚
 (表櫓3枚、中櫓3枚、艫櫓2枚)、ス

60) バンカー1枚とみる外あるまい。

56) 前註(40)に同じ。

- 「神皇正統記」(前掲)、「神皇正統記」(24)
 (頁101)、「神皇正統記」(25)、「神皇正統記」
 (26)、「神皇正統記」(27)、「神皇正統記」(28)
 (29)、「神皇正統記」(30)、「神皇正統記」(31)
 (32)、「神皇正統記」(33)、「神皇正統記」(34)
 (35)、「神皇正統記」(36)、「神皇正統記」(37)
 (38)、「神皇正統記」(39)、「神皇正統記」(40)
 (41)、「神皇正統記」(42)、「神皇正統記」(43)
 (44)、「神皇正統記」(45)、「神皇正統記」(46)
 (47)、「神皇正統記」(48)、「神皇正統記」(49)
 (50)、「神皇正統記」(51)、「神皇正統記」(52)
 (53)、「神皇正統記」(54)、「神皇正統記」(55)
 (56)、「神皇正統記」(57)、「神皇正統記」(58)
 (59)、「神皇正統記」(60)、「神皇正統記」(61)
 (62)、「神皇正統記」(63)、「神皇正統記」(64)
 (65)、「神皇正統記」(66)、「神皇正統記」(67)
 (68)、「神皇正統記」(69)、「神皇正統記」(70)
 (71)、「神皇正統記」(72)、「神皇正統記」(73)
 (74)、「神皇正統記」(75)、「神皇正統記」(76)
 (77)、「神皇正統記」(78)、「神皇正統記」(79)
 (80)、「神皇正統記」(81)、「神皇正統記」(82)
 (83)、「神皇正統記」(84)、「神皇正統記」(85)
 (86)、「神皇正統記」(87)、「神皇正統記」(88)
 (89)、「神皇正統記」(90)、「神皇正統記」(91)
 (92)、「神皇正統記」(93)、「神皇正統記」(94)
 (95)、「神皇正統記」(96)、「神皇正統記」(97)
 (98)、「神皇正統記」(99)、「神皇正統記」(100)

- 57) 前註(26)に同じ。
 58) 『海軍歴史』巻之23(原書房覆刻本、
 445頁)。
 59) 前掲『砲庵十種』所収、112頁。
 60) 前註(58)に同じ。
 61) 前掲『砲庵十種』所収、114頁。
 62) 『軍艦造法』(神戸大学図書館住田
 文庫蔵)。
 63) 前註(26)に同じ。
 64) 前註(42)に同じ。
 65) 『御用日記』所収「御用
 舟之事」(『新撰北海道史』第5巻所収、
 1386~7頁)。
 66) 高松家『御用日記』安政6年6月9日
 条(東京大学史料編纂所蔵)。
 67) 前註(42)に同じ。
 68) 『文政のうた』(『東京史市橋港
 湾篇』第3所収、6~7頁)。
 69) 前註(25)に同じ。
 70) 「大元丸御船拝借願」(『七十冊物語』

集』所収，国立国会図書館蔵旧幕引継書)

- 71) 前註(58)に同じ。
 72) 東京工芸史料編纂所蔵。
 73) 「栗本御雲翁の自伝」(『旧幕府』第2巻第3号，1898年，原書房蔵刻合本3所収)。
 74) 前掲『薩藩海軍史』上巻，732～48頁。
 75) 下巻(北海道同盟著記館，1892年)436頁。
 76) 前註(65)に同じ。
 77) 「大船の説」(前掲『肥後十種』所収，114頁)。
 78) 「獅子滾丸」(同前，163頁)。
 79) B. Greenhill, *The life and death of the Merchant Sailing Ship* (H.M.S.O., 1980), p. 8.
 80) 例えは，嘉永6年6月19日付川路聖謨宛宛宛川有昭書簡(『川路聖謨文書』第8所収，書翰番号83，345～8頁)を参照。
 81) こゝについて次節を参照したい。
 82) 宛川有昭宛阿部正弘書簡(『水戸藩史

料』上編乾所収，102～3頁）

83) 例之は、天保9年の「戊戌封事」(『

95) 水戸藩史料(別記上所収, 106頁), 頁

96) 保14年8~閏9月の四老中宛書簡(同前)

97) 172 ~ 85頁) を参照。

84) 『水戸藩史料』別記下, 225 ~ 42頁。

85) 以上の経緯については、『水戸藩史料』

上編乾, 104 ~ 18頁。同前 7, 同3

86) 同前, 104 頁. 某某外國關係文書附錄之

87) 『水戸市史』中巻(3)所収, 1102~

99) 4頁.

88) 『水戸藩史料』別記上所収，227頁。

89) 『水戸市史』中巻(3) 1107頁。

90) 前掲『長崎海軍伝習所の日々』, 200

頁。三皇宮廟 = 雄仁水戸新製之御船并 =

91) 『江川担庵全集』下卷所収，9～10頁

92) 『海防諸議』 (東北大学図書館蔵) 戸

93) 御用方諸書留 (長崎市立博物館蔵)

所收。 1928.2.2.

『嘉永安政之書集拔萃』(『幕末外国
関係文書附録之三』所収, 50頁)。
95) 東京大学史料編纂所蔵。
96) 前註(24)に同じ。
97) 前註(78)に同じ。
98) 『村垣淡路守公務日記』6, 安政2年
12月24日条(『幕末外国関係文書附録之
三』所収, 449頁)。同前, 7, 同3年
3月1日条(『幕末外国関係文書附録之
四』所収, 64頁)。
99) 『金杉兵にあそぶ記』(東北大学図書
館蔵)。この見聞記には年紀がないが、
安政2年であることは確實である。因に、
彼の『日次』13, 安政2年5月7日条に
は「芝金杉浜=遊々水戸新製の御船并=
薩州之大炮船ヲ見る。記有リ」と記され
ている(同前蔵)。
100) 『村垣淡路守公務日記』7, 安政3年
5月25日(『幕末外国関係文書附録之四』
所収, 152頁)。

- 94) 『嘉永安政之書集拔萃』(『幕末外国
関係文書附録之三』所収, 50頁)。
95) 東京大学史料編纂所蔵。
96) 前註(24)に同じ。
97) 前註(78)に同じ。
98) 『村垣淡路守公務日記』6, 安政2年
12月24日条(『幕末外国関係文書附録之
三』所収, 449頁)。同前, 7, 同3年
3月1日条(『幕末外国関係文書附録之
四』所収, 64頁)。
99) 『金杉兵にあそぶ記』(東北大学図書
館蔵)。この見聞記には年紀がないが、
安政2年であることは確實である。因に、
彼の『日次』13, 安政2年5月7日条に
は「芝金杉浜=遊々水戸新製の御船并=
薩州之大炮船ヲ見る。記有リ」と記され
ている(同前蔵)。
100) 『村垣淡路守公務日記』7, 安政3年
5月25日(『幕末外国関係文書附録之四』
所収, 152頁)。

故¹⁰¹）「武蔵の川路を築く」といふこと（101）

（「武蔵の川路を築く」といふこと（101）
「武蔵の川路を築く」といふこと（101）

「武蔵の川路を築く」といふこと（101）
「武蔵の川路を築く」といふこと（101）

「武蔵の川路を築く」といふこと（101）
「武蔵の川路を築く」といふこと（101）

「武蔵の川路を築く」といふこと（101）
「武蔵の川路を築く」といふこと（101）

「武蔵の川路を築く」といふこと（101）
「武蔵の川路を築く」といふこと（101）

「武蔵の川路を築く」といふこと（101）
「武蔵の川路を築く」といふこと（101）

「武蔵の川路を築く」といふこと（101）
「武蔵の川路を築く」といふこと（101）

「武蔵の川路を築く」といふこと（101）
「武蔵の川路を築く」といふこと（101）

「武蔵の川路を築く」といふこと（101）
「武蔵の川路を築く」といふこと（101）

「武蔵の川路を築く」といふこと（101）
「武蔵の川路を築く」といふこと（101）

差引いた値をトリムと呼ぶ。編集者はこの定義に従うとすると、首尾喫水の差が負数というのは、前部喫水のほうが大きいこと、つまり船が頭を突込んだことを意味するから、鋤雲ではなく、沢の述べに依拠したことになる。海軍畑を歩んだ沢の経歴を考えてのことだろうか。

108) 『水戸藩史料』上編乾所収、104頁。

109) 『府治類纂』（『東京市史稿港湾篇』第3所収、681頁。

110) 『古賀西便統記』安政元年11月21日条

（『幕末外国関係文書附録之一』所収、341頁）。

当時下田でロシア使節と花接していた古賀諱一郎は、川路聖謨から聞いた話と次のように記している（草は川路、坎元は育昭を指す）。

草日、坎元所創密洋船、不下海、令八百人推挽、滾不獲削而已、改用絞車、便動駕幾尺

125) 前掲『松高日記』28, 安政2年4月14日条。

126) 前掲『幕末維新風雲通信』所収, 書翰番号49, 119頁。

127) 『^{幕末}御所同等之留』所収文書(国立公文書館内閣文庫蔵)。この文書は、万延元年8月に井上信濃守等四名が造船場五人足寄場地内から軍艦操練所に移転することと勘定所に上申したものである。

128) 前掲『安政元年海防記事』安政2年2月21日条。

同年3月28日条に記された「此節之競物」の一つに

○出そうで出なひ物きんハ
細島の大船

とみえるのも、本濟に関じ込められた旭日丸と夜月、たもつと考えてよからう。

129) 前註(121)参照。

130) 『柯垣漫路守公務日記』5, 安政2年4月16日条(『幕末外国関係文所附録之

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

本日

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

夏911、102番

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

本日12月

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

1011、102番

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。(82)

三』所収、231頁)。

131) 前掲『安政元年海防記事』安政2年4月29日条。

132) 前掲『金杉沢にあそぶ記』。

133) 『塵壺』安政6年10月6～17日条(『日本庶民生活史料集成』第2巻所収、419頁)。

134) 前掲『長崎海軍伝習所の日々』、110、200頁。

135) 『水戸藩史料』上編乾128頁。

136) 清水については、『御連向廻状留書帳』(前掲『臼井家文書』上巻所収、552頁)。

137) 兵庫については尾鷲史料中の浦触(石井謙治氏の御教示による)。備前金因については、前掲高松家『御用日記』安政6年4月8日条。

138) 本唐津については安政6年『御触留書』(長崎県立図書館蔵)。長崎については、前掲『長崎海軍伝習所の日々』、200頁。大砲廻漕の浦触が出されたのは6月のこ

候書付」(『陸軍歴史』巻14、原書房復刻本、407頁)。
 (52) 『大日本維新史料』第一編、二、弘化3年8月20日条。
 (53) 同前、第一編、三、弘化4年1月22日条。『通航一覽統輯』附録卷之7、12(清文堂出版本、107~15、194~8頁)。
 (54) 『大日本維新史料』第一編、三、弘化4年1月22日条。
 (55) 『御目付松平式部少輔殿御備場向御見分一件帳』(『浦賀奉行所史料集第一集』下巻、400~1頁)。
 (56) 佐藤昌介『洋学史の研究』(中央公論社、1975年)、327~3頁。
 (57) 「スルー・フ船評議」(『箋策雅収』所収、岡山大学池田家文庫蔵)。
 (58) 『房総御備場御用一件付扣』三、嘉永2年2月8日条(東京大学史料編纂所蔵)。
 (59) 前註(157)に同じ。
 (60) 「スルー・フ形御船絵図面等差上候儀ニ

- 候書付」(『陸軍歴史』巻14、原書房復刻本、407頁)。
 (52) 『大日本維新史料』第一編、二、弘化3年8月20日条。
 (53) 同前、第一編、三、弘化4年1月22日条。『通航一覽統輯』附録卷之7、12(清文堂出版本、107~15、194~8頁)。
 (54) 『大日本維新史料』第一編、三、弘化4年1月22日条。
 (55) 『御目付松平式部少輔殿御備場向御見分一件帳』(『浦賀奉行所史料集第一集』下巻、400~1頁)。
 (56) 佐藤昌介『洋学史の研究』(中央公論社、1975年)、327~3頁。
 (57) 「スルー・フ船評議」(『箋策雅収』所収、岡山大学池田家文庫蔵)。
 (58) 『房総御備場御用一件付扣』三、嘉永2年2月8日条(東京大学史料編纂所蔵)。
 (59) 前註(157)に同じ。
 (60) 「スルー・フ形御船絵図面等差上候儀ニ

168) 『近海御備向并浦賀表御備場共見分仕候趣申上候書付』(同前、433頁)。

169) 第4章註(110)を参照。

170) 『通航一覽続輯』巻之11(清文堂出版本、181~2頁)。

171) 田保楠潔『増訂近代日本外国関係史』(原書房、1976年復刻)450~73頁。

172) 嘉永6年2月2日付島津久寛宛書簡(『島津有彬文書』下巻一、文書番号144)。

173) 嘉永5年12月27日付幕府への届書(同前、文書番号141)。

174) 『維新史料綱要』巻1、(嘉永6年4月28日条。

175) 嘉永6年4月29日手交の覚(『島津久寛宛書簡』所収、慶応義塾大学図書館蔵、以下、同書を『書類』と略称する。

176) 『通航一覽続輯』巻之144(清文堂出版本第4巻、767~77頁)。

177) 浦賀奉行の回答及びスルー74艘の建

1841 前注(80)に同じ。
 1842 前注(82)に同じ。
 1843 嘉永6年7月28日付の覚(前掲『書類』所収。
 1844 「御軍艦御製造之儀申上候ニ付猶又見込申上候書付」
 1845 浦賀表御備御代船御製造之儀猶又奉伺候書付(同前)。
 1846 嘉永6年9月5日付「覚」(同前)。
 1847 『維新史料綱要』巻1、弘化4年2月9日、5月29日条。
 1848 『大日本維新史料』第一編、二、弘化3年8月4日条。
 1849 同前、弘化3年9月19日条。
 1850 前注(155)に同じ。
 1851 同前。

1852 造の許可については、目下のところそれを直接に示す史料は見出せないが、『浦賀表御備御代船御製造之儀申上候書付』(前掲『書類』所収)から本文の如くに解釈して差支えない。
 1853 前注(80)に同じ。
 1854 前注(82)に同じ。
 1855 嘉永6年7月28日付の覚(前掲『書類』所収。
 1856 「御軍艦御製造之儀申上候ニ付猶又見込申上候書付」
 1857 浦賀表御備御代船御製造之儀猶又奉伺候書付(同前)。
 1858 嘉永6年9月5日付「覚」(同前)。
 1859 『維新史料綱要』巻1、弘化4年2月9日、5月29日条。
 1860 『大日本維新史料』第一編、二、弘化3年8月4日条。
 1861 同前、弘化3年9月19日条。
 1862 前注(155)に同じ。
 1863 同前。

凡そこの二冊、如うして二冊の
前、中、後の三冊の序文を
前、中、後の三冊の序文を
前、中、後の三冊の序文を
前、中、後の三冊の序文を
前、中、後の三冊の序文を

- 188) 同前。
189) 『大日本維新史料』第二編、二。安政元年正月是月条。
190) 前註(158)に同じ。
191) 前註(8)に同じ。
192) 江戸旧事米訪会編・大久保利謙編輯『江戸』第二巻渉外編、96～8頁。
193) 長崎県立図書館蔵。
194) 『御役所附申渡留』所収(同前蔵)。
195) 『大日本維新史料』第一編、二。弘化3年8月9日条。
196) 『柳營補任』。
197) 『大日本維新史料』第一編、五。弘化4年4月21日条。
198) 東京大学史料編纂所蔵。
199) 前註(165)に同じ。
200) 前註(170)に同じ。
201) 備砲については「御軍艦御据箇其外御新製之儀奉伺候書付」(前掲『書類』所収)、檣については『重米利加飛掛掛町

- 188) 同前。
189) 『大日本維新史料』第二編、二。安政元年正月是月条。
190) 前註(158)に同じ。
191) 前註(8)に同じ。
192) 江戸旧事米訪会編・大久保利謙編輯『江戸』第二巻渉外編、96～8頁。
193) 長崎県立図書館蔵。
194) 『御役所附申渡留』所収(同前蔵)。
195) 『大日本維新史料』第一編、二。弘化3年8月9日条。
196) 『柳營補任』。
197) 『大日本維新史料』第一編、五。弘化4年4月21日条。
198) 東京大学史料編纂所蔵。
199) 前註(165)に同じ。
200) 前註(170)に同じ。
201) 備砲については「御軍艦御据箇其外御新製之儀奉伺候書付」(前掲『書類』所収)、檣については『重米利加飛掛掛町

奉行支配組与力浦賀御用日記』安政元年
2月15日条（『幕末外国関係文書附録之
一』所収、613頁）。

202) 前註(177)(181)(182)に同じ。

203) 前註(177)(181)に同じ。

204) 前註(158)に同じ。

205) 例えは、F. E. Pavis, *Souvenirs de Marine*, vol. 6,
Paris, 1908.

206) 『押送形御船三艘新規御造建仕様目論
見帳』（『浦賀奉行所関係史料』第4集
所収、222～8頁）。

207) 前註(158)に同じ。

208) 前註(206)に同じ。

209) 前註(165)に同じ。

210) 同前。

211) 嘉永3年7月に浦賀奉行浅野から勘定
奉行に提出された報告書（前掲『近海御
備向見分御用留』ニ所収）。

212) 前註(157)に同じ。

213) 同前。

- 214) 同前。
- 215) 前註(165)に同じ。
- 216) 前註(206)に同じ。
- 217) 前註(170)に同じ。
- 218) 「御鉄砲方見込書」(『陸軍歴史』巻15、原書房復刻本上巻、447頁)。
- 219) 前註(166)に同じ。
- 220) 「浦賀表御備御代船御製造の儀猶又奉伺候書付」(前掲『書類』所収)。
- 221) A. L. Halloran, WAE YANG JIN, *Eight Months' Journal kept on board one of Her Majesty's Sloops of war during visits to Lochoo, Japan and Pootoo* (London, 1856) pp. 81~82。
- 222) 『通航一覽統頼』巻之56(清文堂出版本第三巻、33頁)。
- 223) 春名徹『にっぽん昔吉漂流記』(晶文社、1979年)、175~92頁。
- 224) 『水戸藩史料』上編乾、115頁。
- 225) 川合彦充『日本人漂流記』(現代教養文庫579、社会思想社、1967年)、247~8頁。

226) 『吉田松陰』日本思想大系54所収、173

227) 頁。前註(102)に同じ。

227) 前註(189)に同じ。

228) 前掲『房総御備場御用一付手扣』五。

229) 辻茂右衛門上書(『幕末外国関係文書
之二』所収、文書番号63)。187年。

230) 前註(181)に同じ。

231) 前註(182)に同じ。

232) 嘉永6年9月7日の申渡書(前掲『書
類』所収)。

233) 前掲『書類』嘉永6年9月8日条。

234) 「御軍艦鳳凰丸御船并御据筒其外御船
式艘右御船屋御舊請中掛手力、同心御扶
持方之儀申上候書付」(前掲『書類』所
収)。

235) 『探辺聊報』(前掲『江戸』第三巻所
収、11頁)。

236) 前註(234)に同じ。

237) 『維新史料綱要』巻1、安政元年5月
4日条。

237) 前掲『書類』安政元年5月11日条。

238) 前註(102)に同じ。

239) 前註(15)に同じ。

240) 南波松太郎・松木哲・石井謙治「『鳳

凰丸・昌平丸御軍艦諸記事』について」

(『海事史研究』第9号、1967年)。

241) 東京大学史料編纂所蔵。

242) 『嘉永六癸随筆』5(東洋文庫蔵)。

243) 『諸御用留帳』(『浦賀奉行所関係史

料』第四集所収、331頁)。

244) 「御軍艦御見分之節心得方奉伺候書付」

(前掲『書類』所収)。

245) 「菱垣廻船歟兎丸凶解略説」(『大阪

市史』第五所収)。

246) 前註(36)に同じ。

247) 前註(220)に同じ。

248) 前註(226)に同じ。

249) 前註(226)に同じ。

250) 前掲『書類』安政元年5月11日条。

251) 前掲『書類』安政元年5月11日条。

238) 前掲『書類』安政元年5月11日条。

239) 前註(102)に同じ。

240) 前註(15)に同じ。

241) 南波松太郎・松木哲・石井謙治「『鳳凰丸・昌平丸御軍艦諸記事』について」(『海事史研究』第9号、1967年)。

242) 東京大学史料編纂所蔵。

243) 『嘉永六癸随筆』5(東洋文庫蔵)。

244) 『諸御用留帳』(『浦賀奉行所関係史料』第四集所収、331頁)。

245) 「御軍艦御見分之節心得方奉伺候書付」(前掲『書類』所収)。

246) 「菱垣廻船歟兎丸凶解略説」(『大阪市史』第五所収)。

247) 前註(36)に同じ。

248) 前註(220)に同じ。

249) 前註(226)に同じ。

250) 前掲『書類』安政元年5月11日条。

251) 前掲『書類』安政元年5月11日条。

第5章

1) 『法規分類大全第一編』運輸門10, 6

頁。以下、法大全・運輸門10, 6頁の
如くに略記する。尚、法文を引用しな

は全文にうけては、煩雑に存るため註記を
省略するが、奥掲は『法規分類大全』と
『法令全書』である。

2) 佐々木誠治『日本海運業の近代化』(海文堂, 1961年)。

3) 法大全・運輸門11, 324~32頁。

4) 『明治期の汽船近代化と日本杉帆船』(『漢教』第215号, 1978年)、『今の子船——舟才船の終焉』(『国説帆船史』三誠堂, 1983年所収)。

5) 慶応元年4月行軍艦奉行上申書(『所軍艦所之留』所収, 国主公文書館内閣文庫蔵)。

6) 『^{日本各地}諸所寄付諸問答類』(『新撰北海道史』第5巻所収, 1388~7頁)。

「万延元年十月竹箱領奉行上申書」(『
船舶事件』船舶^{乗組}一件^{乗組}所収、東京大学
史料編纂所蔵)。
9) 横石長と東貢について付慶応3年正月
竹箱領奉行上申書(『船舶事件』内国
船族率一件他、同前蔵)、建速貢につ
いて付安政6年11月村岡奉行上申書(前
註(8)に同じ)。
10) 横石長について付「沿海御取締見込書
(『幕末外国関係文書之十四』所収、文
書番号201、620頁)、東貢について付
「安政元年海防記事」安政2年2月22日
条(東京大学史料編纂所蔵)、建速貢に
ついて付「打垣没降年公務日記」安政3
年5月4日条(『幕末外国関係文書附録
之四』所収、130頁)。
11) 東貢について付、例えに「船名前書帳」
(『税海軍史料叢書』第6巻所収、520
〜40頁)、建速貢について付同時期の通

7) 同前。
8) 万延元年10月竹箱領奉行上申書(『
船舶事件』船舶^{乗組}一件^{乗組}所収、東京大学
史料編纂所蔵)。
9) 横石長と東貢について付慶応3年正月
竹箱領奉行上申書(『船舶事件』内国
船族率一件他、同前蔵)、建速貢につ
いて付安政6年11月村岡奉行上申書(前
註(8)に同じ)。
10) 横石長について付「沿海御取締見込書
(『幕末外国関係文書之十四』所収、文
書番号201、620頁)、東貢について付
「安政元年海防記事」安政2年2月22日
条(東京大学史料編纂所蔵)、建速貢に
ついて付「打垣没降年公務日記」安政3
年5月4日条(『幕末外国関係文書附録
之四』所収、130頁)。
11) 東貢について付、例えに「船名前書帳」
(『税海軍史料叢書』第6巻所収、520
〜40頁)、建速貢について付同時期の通

- 11) 東京市史。『酒田市史』史料篇4所収、425~8頁。
 12) 『御用留帳』(『酒田市史』史料篇4所収、425~8頁)。
 13) 『明治維新時 酒田藩邸報』(東京大学蔵)。
 14) 「奉願上候事」(齊藤誠一「新規二本橋舟船製造領主精勤定帳」の複製について」『海事資料館年報』No.12, 1984年)。
 15) 岡山大学池田家文庫蔵。
 16) 『貴族院議員会談事通記録』18~22, 56~87頁。
 17) 「会」子報」(『工学会誌』第105巻, 明治23年9月)。
 18) 同前。
 19) 法大全一・祖祝内報祝1, 686頁。
 20) 『貴族院議員会談事通記録』20頁。
 21) 同前, 61~2頁。
 22) 前註(4)に同じ。
 23) 三國歴史民族資料館蔵。石井謙治氏の複製示による。

- 11) 東京市史。『酒田市史』史料篇4所収、425~8頁。
 12) 『御用留帳』(『酒田市史』史料篇4所収、425~8頁)。
 13) 『明治維新時 酒田藩邸報』(東京大学蔵)。
 14) 「奉願上候事」(齊藤誠一「新規二本橋舟船製造領主精勤定帳」の複製について」『海事資料館年報』No.12, 1984年)。
 15) 岡山大学池田家文庫蔵。
 16) 『貴族院議員会談事通記録』18~22, 56~87頁。
 17) 「会」子報」(『工学会誌』第105巻, 明治23年9月)。
 18) 同前。
 19) 法大全一・祖祝内報祝1, 686頁。
 20) 『貴族院議員会談事通記録』20頁。
 21) 同前, 61~2頁。
 22) 前註(4)に同じ。
 23) 三國歴史民族資料館蔵。石井謙治氏の複製示による。

- 23) 藤田 大助、祖税門雜稅、(前掲) 頁 428~49 頁。
 24) 前註 (21) に同じ。
 25) 前註 (17) に同じ。
 26) 前註 (21) に同じ。
 27) 前註 (21) に同じ。
 28) 前註 (21) に同じ。
 29) 前註 (21) に同じ。
 30) 前註 (21) に同じ。
 31) 前註 (21) に同じ。
 32) 前註 (21) に同じ。
 33) 前註 (21) に同じ。
 34) 前註 (21) に同じ。
 35) 前註 (21) に同じ。
 36) 前註 (21) に同じ。
 37) 前註 (21) に同じ。
 38) 前註 (21) に同じ。

- 24) 法大全ニ・祖税門雜稅、428~49 頁。
 25) 前註 (21) に同じ。
 26) 前註 (17) に同じ。
 27) 前註 (21) に同じ。
 28) 前註 (21) に同じ。
 29) 前註 (21) に同じ。
 30) 前註 (21) に同じ。
 31) 前註 (21) に同じ。
 32) 前註 (21) に同じ。
 33) 前註 (21) に同じ。
 34) 前註 (21) に同じ。
 35) 前註 (21) に同じ。
 36) 前註 (21) に同じ。
 37) 前註 (21) に同じ。
 38) 前註 (21) に同じ。

- 51) 「帆船狭直狭土ニ因スル法律案件別集
員会々議録」(『^{第二期}貴族院委員会々議
録』)。
- 52) 前註(34)に同じ。
- 53) 前註(3)に同じ。
- 54) 同前。
- 55) 「日本船舶五百石以上製造禁止」條
(『元老院會議筆記』後期第23卷所収、
1259~306、1509~10頁)。
- 56) 前註(3)に同じ。
- 57) 前註(55)に同じ。
- 58) 前註(2)に同じ。
- 59) 三机良一「水上交通」(『整田武・児玉
幸多編『交通史』梓桑日本史叢書24、小
川大版社、1970年)。
- 60) 前註(4)に同じ。
- 61) 同前。
- 62) 前註(55)に同じ。
- 63) 同前。
- 64) 『^{第九回}貴族院議事追記録第七号』58頁。

- 51) 「帆船狭直狭土ニ因スル法律案件別集
員会々議録」(『^{第二期}貴族院委員会々議
録』)。
- 52) 前註(34)に同じ。
- 53) 前註(3)に同じ。
- 54) 同前。
- 55) 「日本船舶五百石以上製造禁止」條
(『元老院會議筆記』後期第23卷所収、
1259~306、1509~10頁)。
- 56) 前註(3)に同じ。
- 57) 前註(55)に同じ。
- 58) 前註(2)に同じ。
- 59) 三机良一「水上交通」(『整田武・児玉
幸多編『交通史』梓桑日本史叢書24、小
川大版社、1970年)。
- 60) 前註(4)に同じ。
- 61) 同前。
- 62) 前註(55)に同じ。
- 63) 同前。
- 64) 『^{第九回}貴族院議事追記録第七号』58頁。

